

海を思う

2013夏会期瀬戸内国際芸術祭が始まりました。この芸術祭の一貫したテーマは「海の復権」。「海の日」が7月にあるように、海を思い、語るには、夏は最も適した季節です。

海と聞くと、まず子どもの頃に歌った歌が頭に浮かびます。「海は広いな大きいな」で始まる童謡の「海」。それから少し気取って、ドヴェッシーの交響詩「海」というところでしょうか。これらの歌や音楽に併せて、小さい頃から親しんできた瀬戸内海の、穏やかで心を優しく包み込んでくれるような景色をはじめとして、各地のさまざまな表情を見せる海の様子が思い出されます。

美しい海としてまず思い浮かべるのは沖縄の海です。高校一年生の夏、国際海洋博覧会に初めて行った沖縄で見たエメラルドグリーンに輝く海の美しさには、いっぺんに魅せられました。その後も沖縄へは何度か行きましたが、街の様子は大きく変わっても、魅惑的な「美ら海」は相変わらずであり、毎回感動を覚えます。

札幌で生活していた時に何度か訪れた、流氷で有名なオホーツクの海も忘れられません。アムール川の河口で発生した流氷が接岸すると、海の上を歩くこともできます。一面、厳寒の真白な氷の世界。でも、流氷が栄養分も一緒に運んで来て、サケ、マス、カニやホタテなどがたくさん採れる漁場として極めて豊かな海なのです。

それから隠岐の海。松江に赴任していた3年間は、夏休みに隠岐の島々を家族で訪れ、透明度の高い澄んだ海でレジャーを楽しみました。ツッピン飛び跳ねるトビウオに囲まれた船釣りや手の感触だけで引っ掛ける夜のイカ釣り、スキューバダイビングなどは隠岐で初めて体験したものであり、思い出の海です。

これら三つの海には、奇しくも国境の海という共通点があります。それぞれが隣国との間で領土領海問題を抱えています。言うまでもなく、全ての海はつながっています。平和の海の象徴とも言える瀬戸内海の水も、これらの海に流れ込んでいるはずです。国境の海、東日本大震災の被災地の海も含めた世界中の「海の復権」を願って、芸術祭を盛り上げていきたいと思います。